

日本の庭と欧米人の眼差し

——明治期における記述の比較分析——

片 平 幸

1. は じ め に

本稿では、明治期に日本に滞在、あるいは居住した欧米人による日本庭園に関する記述を比較し、日本と西欧との交流史にかれらの眼差しを位置づけてみたい。分析の対象とするのは、西欧への日本の紹介において重要な役割を果たしたエドワード・モース (Edward S. Morse 1838-1925) とジョン・ラファージ (John La Farge 1835-1910)、そしてバジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain 1850-1935) とラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn 1850-1904) である。動物学者として知られるモースとアメリカでのジャポニズムの火付け役である画家ラファージ、そして英国の言語学者のチェンバレンと作家ハーン——かれらの注いだ眼差しを文脈とともに読み解き、相違点と共通点を整理する。庭園史という枠組にとどまらない日本と西欧の文化交流史という観点から、庭の記述の比較分析をしていく。欧米人による日本庭園論としては、すでにイギリス人建築家のジョサイア・コンドル (Josiah Conder 1852-1920) が明治17 (1886) 年に在日アジア協会の機関誌に論文 (“The Art of Landscape Gardening in

* 本学国際教養学部

キーワード：エドワード・S・モース，ジョン・ラファージ，

バジル・H・チェンバレン，ラフカディオ・ハーン，日本の庭

Japan”)を、そして明治26(1893)年には著作 *Landscape Gardening in Japan* を出版していた。コンドルの日本庭園論は、欧米で影響力をもつと言われてきているが、これまで十分に検証されていない。そこで本稿では、随所に、コンドルと4人による記述との関連性についても言及していく。

2. モースのみた日本の庭：「観察」に基づく生活文化のなかの庭

モースの日本庭園に対する理解を考察する際のキーワードとなるのは、「観察」という方法である。明治10(1877)年六月に海洋生物(腕足類)の調査のために来日したエドワード・モースは、大森貝塚の発見やダーウインの「進化論」の紹介、そして東京大学の初代動物学の教授を務めるなど、近代日本の科学研究への貢献者として知られている。モースは、明治13(1882)年までに三回訪日しており、その際に書き溜めた観察日記を基に、*Japanese Homes and their Surroundings* (『日本人のすまい』、または『日本のすまい・内と外』)が明治17(1886)年に出版された¹⁾。これは、コンドルの論文が在日アジア協会の機関紙に掲載された年でもあるが、明治13(1882)年までの観察日記を基にしており、コンドルの論文発表より以前に執筆は終わっていた。

Japanese Homes and their Surroundings は、全10章から成り、日本の住居の種類や特徴について、玄関や庭など室内外に関する説明の他、古代の日本家屋や近隣諸文化の家屋について論じている。第6章では「庭」を取り上げ、日本家屋の庭全般を主な対象として論じ、また日本滞在中に宿泊した民宿の庭に関する記述などもある。モースの日本の庭に関する記述のなかでまず目をひくのは、アメリカの庭園に対して皮肉をこめた表現を織り交ぜながら批判的見解を示す点である。

第6章の冒頭には、「フランスの整形式庭園の影響」や「バラバラに配

置された花壇」,「出来るだけたくさんの種類と量を詰め込もうとする植え込み」などが、アメリカの庭園に配置されていることが批判的に描写されている。それが徐々に「配色や色の調和」を考慮する傾向になり、「型にはまった花壇」や「自然を無視して造られた墓」などが配置されるのに代わって、一面に緑色の草が生い茂るよう統一されていったという²⁾。一見、バランスの欠如から調和へという改善を伝えているようだが、アメリカの庭園の多くが緑色の草に覆われるように取って代わったのは、まるで「フレスコ画を天井に描こうと苦心したものの上手くはいかず、結局は一面を一色に塗りつぶしてしまうような無知さと無能さの自認である」と、モースは酷評している³⁾。全体のバランスを欠いているか、画一的であるか、アメリカには両極端の庭園様式が乱造されているというモースの認識を読み取ることができる。

アメリカの庭園の特徴を皮肉交りの表現で論じたモースは、日本の庭においてもっとも重要な要素として「石」を紹介している。日本の庭では「不規則でグロテスクな形象の石と巨大な岩板は庭の重要な構造をなし、ピクチャレスクで奇妙に象られた石や岩は、アメリカの庭の花々に相当する」と論じている⁴⁾。「グロテスク」や「奇妙な形象」という表現は、後に日本の庭園研究者たちによって批判を受けることになるのだが、これらの語は、否定的なニュアンスを含むというよりは、むしろ18世紀のイギリスを席卷した「ピクチャレスク」と称される美意識に根ざす語としてモースが選択したと解釈するのが妥当であり、コンドルの日本庭園論の語の用法とも重なり合う点は特筆に値する⁵⁾。さらに、日本の庭では石や岩が大変好まれる「装飾」であるため、その「正しい配置」には「徹底した綿密さ」があり、それを記したのが秋里の『築山庭造伝』(1829)と紹介している。しかし、モースは、「徹底した細密さ」を観察して記録することにとどまり、「細密さ」に還元し得ない領域——例えば背後にあるやもしれない思

想や審美基準など——については言及してはいない。

モースは日本庭園の特徴をその「簡素さ」に見出し、次のような結論を導いている。

The secret in a Japanese garden is that they do not attempt too much. That reserve and sense of propriety which characterize this people in all their decorative and other artistic work are here seen to perfection⁶⁾.

日本の庭の秘訣は、多くを試みすぎないことである。全ての装飾的あるいは芸術的作業にみられる慎み深さと礼儀正しさという日本人独特の気質はここで完成の域に達している。

「多くを試みすぎないこと」、これがモースの伝える日本庭園の極意である。ではこの極意が何に由来するのか。この問いに対して、その答えを庭園や芸術の思想や哲学に還元せずモースは次のよう論じた——「装飾的あるいは芸術的な作業にみられる慎み深さと礼儀正しさという日本人独特の気質」。日本人独特の気質——日本ではたとえ少しの土地でも、あるいは混み合った街中、また貧しい家でさえも、簡素な庭を作り出すと伝えているが、これは、モースの日々の観察の記録とそこから導いた結論であった。日本の庭には、思想や哲学があるという前提や仮説を立てるのではなく、あくまでも観察可能な範囲内の特徴を捉え、そこから日本の人々の性質を記述しようという目的と関心が、モースの著書の基軸として通底していたのである。

以上のようなモースの姿勢は、*Japanese Homes and their Surroundings* の序章でも示されている。異文化とそこに生きる人々を「色のないめがね」で見ることが「民族学」にとって重要であるという主張からは、本書が、家屋とその周辺を取り巻く生活文化を伝達するという「民族誌」的な性質

を帯びていたことがみえる⁷⁾。

モースの生活文化に関する「観察」という手法は、かれが過ごしたニューイングランドにおける知的環境と関連させて論じられている⁸⁾。それらを要約すれば、モースが本国アメリカで博物学研究者として活動を始める19世紀半ばとは、ボストンを中心とした学術環境に重要なシフトが起っていた時期であった。そのシフトとは、広範囲に渡る領域を扱いながら人々の生活に根ざした知識の確立を目指す従来の研究方針から、大学機関における技術や科学の専攻の設立に伴う専門性重視への移行を意味する。その過渡期に生きたモースは、科学者としての訓練を受けながらも、同時に専門性に限定されきれない好奇心に基づく広範な領域を扱い、生活文化の解明を目指した最後の世代に属していた。

かれの日記を基に出版された *Japan Day by Day* (『日本その日その日』)⁹⁾からもわかるように、モースの好奇心は、陶器の収集や茶の湯そして謡の習得など、ひろく日本の伝統文化全般に及んでいる。一つの領域に限定されることのない広範な好奇心と科学的な訓練の共存こそが、日本の庭園に注がれたモースの視線の根底にあったといえるだろう。

3. ラファージの見た日本の庭：「日常性」と「装飾性」

モースは、帰国後、ボストンで日本に関する講演を行っており、彼の一連の講演は、ボストンの知識階級に属する人々に共有されていた漠然とした日本への関心を、実際の来日へと至らせる契機ともなったといわれている。そのなかの一人に画家のラファージがいる。ラファージは画家としての創作活動だけでなく、1870年には英文による初めての日本美術論ともいわれる“An Essay on Japanese Art”という日本美術論を執筆し、アメリカにおけるジャポニズムの火付け役といわれている¹⁰⁾。ラファージは、親友で作家のヘンリー・アダムズとともに明治19(1886)年の夏から三ヶ月間

来日し、モースの紹介を通じて、岡倉天心とビゲローそしてフェノロサを案内役として、日本各地を訪れた。この時以来岡倉とラファージの交流は続き、帰国後の明治30（1897）年にまとめた日本の滞在記 *An Artist's Letters from Japan*（『画家東遊録』）は岡倉に、そして明治40（1906）年に出版された岡倉の *The Book of Tea*（『茶の本』）はラファージに、それぞれ献呈されている¹¹⁾。

横浜港に到着したラファージとアダムズは、三ヶ月間の日本滞在中に東京と日光そして鎌倉と京都、岐阜と蒲原（静岡県）を回った。二人は岡倉らに導かれて寺社見物や古美術の鑑賞と購入、そして能楽鑑賞などを行っている。この著作の中でラファージは滞在先の庭について記しているが、その関心の所在やアプローチにおいて、19世紀末のボストンという背景を共有するモースと興味深い相違点と共通点を示している。Japanese Architecture（日本建築）という章で、ラファージは日光での宿泊先の満願寺（現、禅智院）の庭について記している¹²⁾。鎌倉中期に建立されたという満願寺の庭の描写を通じて、ラファージは日本の庭全般へと解釈を押し進め、日本の庭は、自然と関連する概念を表現するという理解を示した。

ラファージは、日本の庭に表現される概念として「安逸、高潔、閑静な老境、良縁そして穏やかな寂しさ」を挙げている¹³⁾。これらの語について、ラファージは「聞いたところによると」とだけ述べており典拠を確定することはできない。しかしこれらの語は、コンドルが *Landscape Gardening in Japan* で提示した「隠逸、長寿、幸福、謙譲、忠誠、安逸、品格と高潔、良縁そして老境」と同一であることから、ラファージの典拠がコンドルであった可能性は高い。コンドルの著作以外の可能性としては、案内役の岡倉やフェノロサそしてビゲロー、または宿泊先の関係者などが考えられるが、いずれも推察の域を超えるものではない。ここで確認できるのは、コンドルにも通じる日本庭園理解が、ラファージを介して旅行記というジ

ジャンルに組み込まれた事実である。日本庭園は抽象的な概念を表すという理解は、庭園の専門書の枠を超えた著作に継承されていったのである。上の引用はまた、同じボストンの知的環境に根ざしながらも、ラファージの関心の所在が先述のモースと異なることをも明示している。つまりラファージの理解の特徴として、モースの関心の外に置かれた日本庭園の概念という側面やその解釈に言及している点を挙げることができるだろう。

ラファージの日本庭園理解の素地を知る手がかりとして、来日前にまとめられたかれの日本美術論について触れておきたい。ラファージの日本美術論は、フランスのジャポニズム批評家シェノー (Ernest Chesneau 1830-1890) の論文 (1868) を素地としたことが指摘されているが¹⁴⁾、そこには、単にラファージの日本美術に対する理解のみでなく、西欧美学の超克を模索するかれの試みが映しだされている。ラファージの日本美術論に通底するのは、日本における美術品と工芸の未分化を理想とみなし、生活文化に根ざした芸術を支持する姿勢である。漆器や陶器を例に、ラファージは日本美術を「芸術と産業が幸せに結ばれた」¹⁵⁾と評している。ラファージは、装飾が施された美術工芸品が、日本では *accompaniments of every-day life* (日常生活の伴)¹⁶⁾であり、それを芸術のあり方の理想と見なしている。さらにラファージは、この「装飾性」と「日常性」を基盤とする芸術のあり方を、工芸品だけでなく北斎をはじめとする浮世絵にも見出した。日本美術への関心を高めたきっかけは、フランス滞在中に見た北斎の浮世絵であったともいわれている¹⁷⁾。

これらの主張には、美術と工芸の分離をはじめとする西欧芸術へのラファージの批判が込められている。こうした美術観の形成には、イギリスの社会思想家で芸術批評家でもあったジョン・ラスキンの影響があったことが指摘されている。ラファージはメリーランド州の大学在学中に、ラスキンの思想に傾倒していたという。さらにラスキンに加えて、中世ヨーロッ

パへの関心とラファエル前派への共鳴、やがて、学問体系として成立する以前の美の法則を捉えようとする「神秘主義的美学」がラファージュの美術観の支柱となっていった。こうして自然との融合を軸とするラファージュの美術観が形成されていく。さらにウィリアム・モリスを中心とした美術工芸運動に触れ、美術と工芸の未分化を理想とする知見を得たのであった。

ラスキンと神秘主義的美学そしてラファエル前派といった要素を吸収したラファージュの美術観に通底するのは、「日常性」と「装飾性」とのバランスに美を見出そうとする眼差しであり、日本は、自然と宗教と芸術そして歴史の「結合」による文明として捉えられていたのだ¹⁸⁾。ラファージュは日光で二ヶ月間滞在した後、京都の大徳寺や清水寺そして黒谷山を訪れているが、そこで庭を見たという記述はない。*An Artist's Letters from Japan* に収められたラファージュの水彩画やスケッチも、四十八点中、日光に関するものが二十七点に対して、京都を描写したものはわずか一点である。「装飾性」と「日常性」を日本美術の特質と見なしたラファージュが選んだのは、京都の著名な庭園ではなく、日常の一部である宿泊先の庭だった。ラファージュは帰国後、ミネソタ州の最高裁判所の壁画制作を依頼され、その題材として日光の庭の情景を選んだという。*The Record of the Predecessors* (先達の記録)と題されたその壁画には、日常の中の庭に注がれたラファージュの眼差しが映しだされているといえるだろう。

4. モースとラファージュの背景：十九世紀末のボストン

同時代のアメリカ東部エリート層に属しながらも、モースが庭の「観察」可能な領域のみを扱ったのに対して、ラファージュは「観察」だけでは捉えきれない庭の概念を言及した。かれらのアプローチの違いはまた、モースがボストンの知的環境の主流を占めるアングロ・サクソン系のプロテスタントであったのに対して、ラファージュが、フランスの上流階級に属する両

日本の庭と欧米人の眼差し

親のもと、フランス移民の社会で育ちカトリックであったという出自の相違とも関連しているかもしれない。モースとラファージは、庭へのアプローチと関心の所在において違いを見せたが、その一方で、二人には着目すべき共通点もある。まず一つに、二人はともに日常生活の一部としての庭を選んだことが挙げられる。モースは民家や民宿を、そしてラファージは日光滞在中の宿泊先であった満願寺を対象として選択した。満願寺の庭が、有名寺院の類としてではなく滞在中の日常の一部として扱われたことは先述の引用で明らかである。二人は既存の有名な庭園の沿革や紹介ではなく、身近な庭を通じて、日常的な日本の庭の特徴を伝えようと試みたのであった。さらに、モースとラファージによる「装飾性」の扱いについて触れておきたい。モースは、庭園に配置された石を「装飾」と見なし、こうした「装飾」を施す「日本人独特の気質」として、「慎み深さと礼儀正しさ」を挙げていた。一方のラファージは、美術における装飾性と日常性のバランスを模策し、日光の東照宮に自然と融合した「装飾」を見いだしている。さらに、かれらの「装飾」に対する評価の基準とは、日常や自然とのバランスであった点においても共通性を見せたのである。

では次に、ヨーロッパを出自とするチェンバレンとハーンは、どのような日本庭園理解を示したのか、2人の記述を検討していく。

5. チェンバレンとハーンの日本の庭理解～コンドルとの関係性を通じて

チェンバレンとハーンの生い立ちや経歴、そして日本での体験などについてはすでに多くの先行研究によって明らかにされており、二人の親交の深さと、それ故に理解の食い違いから迎えた訣別は、修復不可能なまでに決定的であったことは知られている¹⁹⁾。海軍中尉の息子として英国の名門に生まれたチェンバレンと、ギリシャ人の母とアイルランド系英国軍軍医

との間に生まれた後、数奇な運命をたどるハーンの日本に対する理解は対照的であったが、2人の日本の庭に対する解釈はどのようなものであったのだろうか。以下では、先行研究の成果を踏まえながら、チェンバレンの *Things Japanese* (1890) (『日本事物誌』) とハーンの *Glimpses of Unfamiliar Japan* (1894) (『知られぬ日本の面影』) のなかの日本の庭に関する記述を比較検討していきたい²⁰⁾。

チェンバレンの *Things Japanese* は、日本に関する約140の項目を「辞書」形式でアルファベット順にまとめたもので、明治23 (1890) 年の初版以降、第6版 (1939) まで版を重ね、ドイツ語版 (1912) やフランス語版 (1931) も発表された。明治期半ばから昭和初期においては、欧米人のための百科事典でもあり、またガイドブックとしての役割を果たすものでもあった。庭については、「garden」という項目が設けられ約二ページ半が割かれており、初版から第六版まではほぼ変更が加えられることなく収録されている。

一方、ハーンの *Glimpses of Unfamiliar Japan* は、来日してから15ヶ月間を過ごした松江について、人々の風習や民話などを綴ったエッセイである。ここに収められた「In a Japanese Garden (日本の庭で)」で、ハーンは松江の自宅の庭について記している。この他にも、ハーンは明治29 (1896) 年には『東の国から』と『こころ』を、そして同37 (1904) 年の『霊の日本で』や『日本—解釈の試み』を次々と著し、ハーンによる日本に関する書物は14冊にも及ぶ。これらの書物は、当時の日本の風俗を伝える貴重な資料としての価値はもちろん、ハーンの感性を映し出す美しい文章も相俟って、英語圏だけでなくドイツやフランスでも日本文化を伝える書としてひろく読まれている。

チェンバレンとハーンは、それぞれ在日アジア協会の機関誌に1886年に掲載されたコンドルの論文「The Art of Landscape Gardening in Japan」を参照したことを明記している。チェンバレンがコンドルを参照したのは、

Things Japanese が同じ在日アジア協会の機関誌に掲載された論文を基に出版されたこととも関連しているが、ハーンもまたコンドルの論文を参考文献として挙げているのは、コンドルの日本庭園論が、19世紀末の外国人たちにとって日本庭園を理解するための拠り所であったという証左ともいえるだろう。以下では、特に、コンドルの日本庭園論がどのように継承され、あるいは継承されなかったのかという点を軸に、チェンバレンとハーンの記述を比較していく。

チェンバレンとハーンによる日本庭園に関する記述のなかで、コンドルの影響を顕著に示している点は、次の三点にまとめることができる。まず、日本の庭は(1)抽象的な観念を表現しており、そして(2)骨格としての石が重要であること、さらに(3)作庭に関する迷信や難解な教えの存在を紹介するという点の三つである。チェンバレンとハーンともにコンドルの著作を参考文献としており、影響がみとめられるのだが、解釈はそれぞれの方向性を示している。

5-1) 日本の庭が何を表現するのかをめぐって

上述のラファージが、日本の庭には「安逸、高潔、閑静な老境、良縁そして穏やかな寂しさ」という考えが表現されていると述べたように、チェンバレンとハーンもまた、日本の庭は抽象的な観念を表していると論じている。典拠を特に明らかにしていなかったラファージに対して、チェンバレンとハーンはコンドルを典拠として挙げているが、二人はそれぞれの方法でコンドルの示した理解に対して独自の解釈を加えている。コンドルの原文とチェンバレンとハーンの表現を比較してみたい。

コンドル

Among the various sentiments which the horticultural artists have pro-

fessed to express in their works, the following may be enumerated: The Happiness of Retirement, Long Life and Happiness, Modesty, Fidelity, Peace, Gentleness and Chastity, Connubial Felicity and Old age²¹⁾.

園芸家達が作品で表現すると主張している情緒（センチメント）とは、次のように挙げることができる——隠逸、長寿、幸福、謙譲、忠誠、安逸、品格と高潔、良縁そして老境。

チェンバレン

Gardens are supposed to be capable of symbolizing abstract ideas, such as peace, chastity, old age, etc²²⁾.

庭は、抽象的な概念を表すことができるかとされている。その概念とは、安逸や高潔、そして老境などである。

ハーン

They held it possible to express moral lessons in the design of a garden, and abstract ideas, such as Chastity, Faith, Piety, Content, Calm, and Connubial Bliss. Therefore were gardens contrived according to the character of the owner, whether poet, warrior, philosopher, or priest²³⁾.

庭のデザインに道徳的な教えや抽象的な概念を表現することが可能である。高潔、信仰、敬虔さ、充足、平穏そして神に恵まれた縁などである。従って、庭は、持ち主の性質によって、つまりそれが詩人なのか武士なのか、哲学者なのかあるいは僧侶なのかによって設計がなされるのである。

コンドルを参照して、庭に抽象的な観念が表現されていると述べつつも、チェンバレンとハーンがそれぞれ原文に変更を加えていることがわかる。それぞれ決して大きな変更を加えているのではないが、チェンバレンとハーンが同じ参考文献に依りながらも、象徴的な読み替えをしていることは

興味深い。まず2人に参照されているコンドルは、日本の庭に表現されているものとして、「隠逸、長寿、幸福、謙譲、忠誠、安逸、品格と高潔、良縁そして老境」という道教と儒教の混合を想起させる観念を挙げている。これに対して、チェンバレンは日本の庭が象徴するのは、「安逸と高潔、老境などである」とコンドルの文章を省略して説明しているに過ぎない。一方のハーンは、日本の庭に表現されている抽象的な観念として「高潔、信仰、敬虔さ、充足、平穏や神に恵まれた縁」と述べ、コンドルの用いた道教や儒教を思わせる語を独自に書き換えているのである。道教や儒教的なニュアンスを含む語を、ハーンは「敬虔 (piety)」や「天の幸い (bliss)」など、信心深さや神を思わせる語へ、より日本の民間信仰を表すに近いとも言えるかもしれない語へと、変換している。この箇所を見る限り、チェンバレンとハーンは、コンドルに単なるマイナー・チェンジを加えただけのようであるが、ここには、二人がいかにコンドルの理解を継承し、あるいは発展させたのが象徴的に現れている。コンドルを出発点として、その枠組みを踏襲するにとどまるチェンバレンと、より日本の文脈に沿った理解、より日本の文化に根ざした理解へと変換していくハーンの違いは、以下でより鮮明になっていく。

5-(2) 石の重要性について

ともにコンドルを軸としながらも、チェンバレンとハーンは日本の庭における石の重要性について、対照的な解釈を示している。コンドルが秋里籬島の『築山庭造伝』(1829)から引用した「石は庭の構成の骨格である」という表現は、チェンバレンとハーンに共通して見出せるが、二人の理解は以下のような違いをみせる。

チェンバレン

For those large stones, which according to Japanese ideas, constitute the skeleton of the whole composition²⁴⁾.

日本人の考えによれば、大きな石は、全体の構図の骨格をなす。

ハーン

Now stones are valued for their beauty; and large stones selected for their shapes may have an aesthetic worth of hundreds of dollars. And large stones form the skeleton, or framework, in the design of old Japanese gardens²⁵⁾.

石はその美しさによって価値が重んじられている。そして形状によって選ばれた大きな石は、数百ドルもの審美的な価値がある。大きな石は、古い日本の庭の設計において骨格、あるいは枠組みをなす。

両者とも、コンドルの「skeleton (骨格)」という語を用いて石が庭園の構造を成すことを説いている。コンドルの引用のみに止まったチェンバレンに対して、ハーンは「美しさ (beauty)」や「審美的な価値 (aesthetic worth)」という語を動員して構造の「骨格」という機能に還元しきれない石の価値を示唆している。

さらにハーンは、「骨格」という機能に還元しつくせない価値をもつ石を、どのように理解すべきかについて、次のように言及している。

Another fact of prime importance to remember is that, in order to comprehend the beauty of a Japanese garden, it is necessary to understand—or at least to learn to understand—the beauty of stones. Not of stones quarried by the hand of man, but of stones shaped by nature only. Until you can feel, and keenly feel, that stones have character, that stones have

日本の庭と欧米人の眼差し

tones and values, the whole artistic meaning of a Japanese garden cannot be revealed to you. In the foreigner, however aesthetic he may be, this feeling need to be cultivated by study. It is inborn in the Japanese; the soul of the race comprehends Nature infinitely better than we do, at least in her visible forms²⁶⁾.

もう一つ覚えておかなければならない重要なことは、日本の庭の美しさを理解するためには、石の美しさを理解すること——少なくとも理解しようと学ぶこと——が必要である。人の手によって作られた石ではなく、自然と形づくられた石のみである。石が個性をもつことを、石が色調 (tone) をもつことをあなたが感じられるまで、しみじみと感じることができるようになるまで、日本の庭全体の芸術的な意味はわからないでしょう。どんなに美意識をもっていたとしても、外国人にとっては、この感じ (feeling) を身につけるためには、学ぶ必要がある。日本人は、生まれもっているのである。日本人の人種としての魂は、われわれ西洋人よりはるかに自然を理解している。少なくとも目に見える表現形式においては。

石のもつ美しさを「感じる (feel)」ことができ初めて日本の庭の美しさが理解できる、という文章の中で、ハーンは「feel」という語を「feeling」も含めて三回用いており、鑑賞者と石が感覚的に接近してこそ日本の庭の理解が成立すると主張している。また、文中の「tones」という語が、絵画など視覚的な対象に用いる際には「色調」、また音楽など聴覚的な対象には「音色」という意を具えていることに着目したい。庭の聴覚性については、「In a Japanese Garden」の後半で、ハーンは自宅の庭で蛙や蟬そして鶯の声や気配に耳を傾ける様子を描き、その音色を「庭の演奏者 (musicians of the garden)」と表現しオーケストラにたとえている²⁷⁾。つ

まり視覚性と聴覚性を併せ持つ「tones」に凝縮されたのは、日本の庭は視覚的な対象ではなく聴覚をも動員し、感じる対象であるというハーン理解ともいえる。

ハーンにとって「tone」という語が重要であることは、*Glimpses of unfamiliar Japan* 中の文法上の間違いについて交わしたチェンバレンとの手紙の中でも示唆されている。2人の間にまだ親交があった頃、チェンバレンはハーン宛の手紙で、*Glimpses of unfamiliar Japan* 中の文法のあやまりについて多くの紙面を割いて指摘した²⁸⁾。その返信としてハーンはチェンバレンに宛てて、無駄の一切を省いた美しい口調でこう反論する——「あなたの教えに従ってその違いを学び、間違いを避けることを目指しましょう。しかし私はその違いを決して〈感じる (feel)〉ことはできないでしょう。私にとっては〈tone〉が全てなのです。言葉そのものは何の意味ももちません」²⁹⁾。ここで文法という理論に忠実なチェンバレンと、「tone」や「feel」という語を重視し感じ得てこそ言葉は意味を持つと主張するハーンの感性が対照的に浮かび上がる。

さらにハーンは上記の引用で、日本人は「生まれもって (inborn)」石を感じる事が可能であり、そして「人種の魂 (the soul of the race)」によって日本人は西欧人よりも自然を理解していると述べている。ここにある「inborn」や「race」という語は、ラファージのような美術的な語彙ともモースのような民族学的な語意とも出自を異にする生理学に依拠するタームである。これらの語は、チェンバレンとの訣別のきっかけの一つともなったスペンサー哲学にハーンが傾倒していたことを暗示している。スペンサー哲学とは、社会進化論で知られるイギリス人哲学者のハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820-1905) によって社会有機体説などを軸に確立された。スペンサーの提唱した説のなかでも、人間の心的現象は観念や感覚の共感を通じて成立すると捉える連合心理学にハーンは影響を受

けたといわれている³⁰⁾。スペンサー哲学というフィルターを通じたハーンの日本の庭に対する理解は、次にみる庭にまつわる迷信などに関する記述からもうかがうことができる。

5-(3) 庭にまつわる迷信や言い伝えについて

作庭における迷信について、チェンバレンとハーンがどのように論じ、コンドルとはどのような関係にあったのかをまとめておきたい。まず、チェンバレンとハーンは、近世の庭書を紹介しながら、庭の石や樹木の配置には陰陽五行説やその他の伝承に基づく迷信や決まりごとがあると論じており、コンドルを踏襲したことが共通して読みとれる。しかし作庭における様々な言い伝えについて、二人はまたもや対照的な理解を示すのであった。

チェンバレンは、日本の庭が神秘的で芸術的な境地に達したのは、15世紀以降、何世代にもわたって洗練と精巧を重ねた結果であり、それ故に専門外の人間には深遠で難解な用語で語られ理解し難いと論じている。そのため、日本の庭には全てにおいて何らかの理由があり、その理由とは多くの場合は「難解 (abstruse)」であると締めくくっている³¹⁾。チェンバレンは、「迷信」の伝承は、質の劣化を防ぐという機能的な役割を果たしていると論じたコンドルをほぼ原意のまま受け継ぎながら、しかしその理由とは詰まるところ理解が難しいという皮肉ともとれるニュアンスを含ませている。

一方のハーンは、地勢学的に特有な形状をもつ日本の庭の石は、見る者の「気分や感覚 (moods and sensations)」を触発するが、それは出雲の古代神話が伝わるよりも以前に、石が「人種の想像力 (the imagination of the race)」に訴えかけているからであると論じている。つまり、石にまつわる言い伝えや迷信は、既に人種に組み込まれた記憶によって伝承される

という³²⁾。生まれるより以前から、すでに石の記憶は日本人に刻み込まれているという一文には、感情や思考は現在において形成されるのではなく、過去の集積から遺伝された本能に基づくという、ハーンが常々唱えていた記憶に対する理解が集約されている。かれはそれを「遺伝的記憶」、「複合的記憶」、「集合的無意識」と称したが、これらの語はスペンサーの「有機的記憶」に由来するものであった。これまでも指摘されているように、人間の本能は過去によって形成されるというハーンを理解は、生物学的な血統をもって「過去」としたスペンサー哲学に加えて、さらに仏教思想的な輪廻転生という「前世」との折衷に成立していた。ハーンの中で、スペンサーと仏教が矛盾なく共存していたことは、スペンサーの *First Principles* (『第一原理』) を評して「スペンサーがその巻を書いていた時には研究していなかったと思われる東洋の深遠な哲学に著しく類似している」と述べたことからもうかがえる³³⁾。ここで明らかになるのは、庭に注がれたハーンの眼差しがスペンサー哲学や仏教的な世界観に依拠していたということである。チェンバレンに宛てた膨大な手紙のうち、その多くでハーンはスペンサーを参照しながら、人間にとって、論理的な思考よりも「感情 (feeling)」や「情感 (emotion)」こそが、「推察力 (reasoning faculties)」よりも重要な役割を果たすと述べている。こうしたハーンの感情や情感を重視する人間観は、かれの随筆からも読みとることができる。五感のすべてを総動員する心性を重要とみなす考え方は、先述した庭の音への言及においても表されていた。

迷信や難解な教えの機能を提示したコンドルと、それをほぼ忠実に受け継いだチェンバレン、そして日本特有の自然によってすでに人種として刻み込まれた想像力へと推論したハーン。コンドルを軸とするならば、そこに立脚し、時には部分的な引用にとどまり、ある時にはほぼ原型を継承するチェンバレンに対して、ハーンは同一の軸から出発しながらも、スペン

日本の庭と欧米人の眼差し

サーを補助線とすることにより、さらにコンドルの開き得なかった地平へと挑んでいるようにみえてくる。

さらにハーンは、庭の芸術的な目的とは真の風景の魅力を忠実に模すこと、そして本物の風景が訴えかける印象を伝達することであり、その点で庭は絵画よりも詩に近いと論じている。自然の風景が、悦びと厳肅さ、そして畏怖と優しさ、また力と安らぎといった感覚に響き、見る人を感動させるように、作庭家は単なる美しさの印象だけでなく「魂の状態 (a mood in the soul)」を真に反映させなければならないと結んでいる³⁴⁾。ここには、作り手と見る側の相互が関係性を築き、魂が響きあうこと、共感することが庭への理解を成立させるというハーンの解釈が示されている。ハーンはスペンサー哲学に立脚し、相互が通じ合う営為としての「伝達」を、日本の庭だけでなく日本文化を理解するための基軸とみなしていたともいえるだろう。

「感情」や「伝達」そして「共感」を重要な概念とみなすハーンの本国の庭理解は、その後の欧米人に広く受け入れられていくことになる。その象徴的な一例として、フェノロサの言葉に触れておきたい。フェノロサのメモの中に、ハーンの「日本の庭で」についての走り書きがある。「ハーンについて (On Lafcadio Hearn)」と題されたメモには、1894年という日付があり、次のように記されていた。

Volume One of the “Glimpses” deals with largely with descriptions of places: Two more specially with customs and beliefs. Its opening essay “In a Japanese Garden” is one of the most exquisite and characteristic. Here, like the Japanese soul, he comes very close to the heart of nature³⁵⁾.

『知られぬ日本の面影』の第1巻は、場所の記述に多くを割いている。

第2巻では、特に習慣や信仰が扱われている。冒頭の「日本の庭」というエッセイは、この上なく美しく独特である。ここでハーンは、まるで日本人の魂のように、自然の本質に限りなく近づいている。

フェノロサはハーンの「日本の庭で」を、「この上なく美しく独特である」と評していた。さらにハーンについて、「日本人の魂のように自然の本質に限りなく近づいている」と述べ、フェノロサはハーンの日本理解、そして自然への理解を讃えている。ハーンは晩年、特に西欧人との交際を嫌ったが、フェノロサはそのハーンが心を許した数少ない友人のひとりであった³⁶⁾。

周知のとおり、フェノロサとは岡倉天心と並んで、欧米における日本美術理解の素地を形成した中心的人物である。フェノロサもまた、19世紀末のボストンでスペンサー哲学に傾倒し、東京大学でスペンサー哲学を教授したことから、かれがハーンの「日本の庭で」から「伝達」や「共感」という鍵概念を読み取ったとも考えられる。この点については推察を進める代わりに、フェノロサが同メモに、チェンバレンを「嘲笑」の人と、そしてハーンを「共感」の人（Contrast with Chamberlain—in tone. Sympathy versus ridicule—）と書き記していることだけを記しておこう。

6. 結 語

19世紀半ばのニューイングランドという学術環境に立脚し、日々の生活の観察から日本の庭を記録したモース。 *Japanese Homes and Their Surroundings* は、日本の生活文化への関心に基づき日常を観察し伝達した「民族誌」であった。一方、ラファージの日本の庭に関する記述は、かれの日本美術に対する理解、つまり「日常性」と「装飾性」の融合と重なり合うものであった。ラファージにとっては、これらの要素こそが西欧美術

を超越するために必要であり、そうした要素が日本の庭にも含まれているという理解を示したといえる。モースとラファージは関心の所在とアプローチで相違点を見せながらも、その一方で、二人は日常の延長線上の庭を対象とし、装飾を肯定的に捉えるという共通点も見せたのであった。

チェンバレンとハーンは、ともにコンドルを参照しながらも、かれらの日本の庭への理解は対照的であった。コンドルの提示した枠組みを超えることなく、むしろその枠を用いて日本の庭への批判を滲ませたチェンバレンに対して、ハーンはスペンサー哲学を支柱にコンドルが到達し得なかった日本庭園理解の境地を切り開いたのである。仏教思想とスペンサーの融合を軸としたハーンにとって、「感覚」が重要であり、「共感」することこそが、日本の庭の、そして日本の文化の特徴を理解することを意味していた。

しかし、対照的な理解を示したチェンバレンとハーンには、見逃せない共通点もある。それは、ふたりが日常の一部としての庭を記述の対象としていた点である。チェンバレンは記述の対象を特定していないが、上述の分析から、民家の庭が想定されていたことは明らかである。また、ハーンが記述の対象としていたのは、松江の自宅の庭であった。アプローチや関心の所在、そして庭への理解がそれぞれ異なりながらも、本章で扱ったモースとラファージそしてチェンバレンとハーンは、いずれも生活文化のなかの庭に関心の対象としたことは共通していたのである。

先に触れたフランスのジャポニズム批評家のシェノーは、第7回パリ万博（1878）に設営された日本の庭について次のように評している——「まず何よりも用に直結する実用性。しかし有用な形態には、あたかも直観によるかのように、巧みで軽妙な、奇想に富んで陽気な創造力の装いが自由に加えられている」³⁷⁾。トロカデロ会場に建てられたのは、約千坪の敷地を築地と竹垣で囲った日本の農家とその庭であった。表門が建てられた敷

地内には、陶製噴水器が置かれた小池や水田、さらに盆栽などを展示した植物園が配置されていた。シェノーの眼差しの先にあったのは、茶室や寺院庭園ではなく、生活文化を伝えるべく展示された農家の庭であったのだ。すると、パリのシェノーの視線と本章で扱ったモースとラファージそしてチェンバレンとハーンの視線が、「日常の庭」に注がれていた点で重なってくる。本稿でとりあげた明治期に日本を体験した欧米人達の眼差しは、主に日常的な民家の庭に向けられていたといえる。モースらが示した庭への関心や理解は、その後、日本と欧米で量産されるようになる「名園」志向の記述とどのような継承や断絶をみせるのか——日本の庭の鑑賞史の続きは、別稿で論じることとしたい。

本文中の日本語訳は、特に断りがない限り筆者による。

注

- 1) Edwards S. Morse, *Japanese Homes and Their Surroundings*, (Boston: Ticknor and Company, 1886)
- 2) Morse 1886, pp. 273-4
- 3) Morse 1886, p. 274
- 4) Morse 1886, pp. 275-6
- 5) ジョサイア・コンドルの日本庭園論の背景としての「ピクチャレスク」と日本の庭園研究者たちによる「ピクチャレスク」の誤読については、拙稿（片平幸「往還する日本庭園の文化史」『桃山学院大学総合研究所紀要』第35巻第2号、2010年1月、33-54頁）で論じた。
- 6) Morse 1886, p. 274
- 7) Morse 1886, pp. 28-33
- 8) 本国におけるモースの考察としては、園田 1993年、中西 2002年などを参照した。
- 9) Edward S. Morse, *Japan Day by Day 1877, 1878-79, 1882-83*, Vol 1-3, (Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1917)
- 10) John La Farge, 'An Essay on Japanese Art', ed. Raphael Pumpelly, *Across*

日本の庭と欧米人の眼差し

- America and Asia*, (New York: Leyoldt and Holt, 1870) pp. 195-203, その他、ラファージについては井戸 1993年などを参照した。
- 11) John La Farge, *An Artist's Letters from Japan*, (New York, The Century, 1897)
 - 12) 日光の「満願寺」は建立1278年、現在、輪王寺の塔頭である禅智院のこと。(井戸 1993年, p. 242)
 - 13) La Farge 1897, p. 126
 - 14) 井戸 1993年
 - 15) La Farge 1870, p. 196
 - 16) La Farge 1870, p. 196
 - 17) 井戸 1993年, 桑原 1981年などを参照した。
 - 18) La Farge 1897, p. 160
 - 19) ハーンとチェンバレンについては、田部 1950年や平川 1987年などを参照した。
 - 20) B. H. Chamberlain, *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects connected with Japan*. (New York and London, Kelly & Walsh, LTD., 1890), Lafcadio Hearn, In a Japanese Garden, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, (Boston and New York: Houghton, Mifflin, 1894)
 - 21) Conder 1893, pp. 126-7
 - 22) Chamberlain 1890, p. 130
 - 23) Hearn 1894, p. 11
 - 24) Chamberlain 1890, p. 129
 - 25) Hearn 1894, p. 9
 - 26) Hearn 1894, pp. 6-7
 - 27) Hearn 1894, pp. 35-48
 - 28) Chamberlain, *Letters from* 1895, p. 127
 - 29) Hearn, *Letters of Lafcadio* 1895, p. 336
 - 30) ハーンがスペンサー哲学に傾倒していたことについては、Tanabe, Ochiai and Nishizaki 1941, 平川 1987年, 牧野 1992年など既に多くの先行研究で明らかにされている。
 - 31) Chamberlain 1890, pp. 129-130
 - 32) Hearn 1894, pp. 8-9
 - 33) Tanabe, Ochiai, and Nishizaki, 1941, p. 198

- 34) Hearn 1894, p. 10
35) 村形 1987年, 第三卷, p. 103
36) フェノロサとハーンの交流については, 村形 1987年, 山口 1982年, 平川 1987年, 牧野 1992年などを参照した。
37) 原典は Ernest Chesneau, Le Japon a Paris, *Gazette des Beaux-Arts*, (n.p.: September, 1878) pp. 385-397 pp. 日本語訳は, 大島 1980年, pp. 119-120 より引用した。

参 考 文 献

- 井戸桂子「明治十九年, アメリカからの来訪者」『異文化を生きた人々』平川 祐弘編, 中央公論社, 1993年, 209-245頁
池田雅之『小泉八雲の日本』第三文明社, 1990年
大島清次の『ジャポニスム 印象派と浮世絵の周辺』, 美術公論社, 1980年
太田雄三『B. H. チェンバレン』リプロポート, 1990年
楠家重敏『ネズミはまだ生きている——チェンバレンの伝記』雄松堂, 1986年
——『B. H. チェンバレン Things Japanese について』雄松堂, 2001年
栗原信一『フェノロサと明治文化』倉田文作監修, 六芸書房, 1968年
園田英弘『西洋化の構造: 黒船・武士・国家』, 思文閣出版 1993年
高木大幹『小泉八雲と日本の心』古川書房, 1981年
田部隆次『小泉八雲』北星堂書店, 1950年
築山謙三『ラフカディオ・ハーンの日本観』勁草書房, 1964年
中西道子『モースのスケッチブック』(新異国叢書 第三輯) 雄松堂出版, 2002年
久富貢『フェノロサ——日本美術に捧げた魂の記録』理想社, 1958年
平井呈一『全訳 小泉八雲作品集 第十二巻』, 恒文社, 1964年
平川祐弘『破られた友情——ハーンとチェンバレンの日本理解』新潮社 1987年
——『小泉八雲とカミガミの世界』文藝春秋, 1988年
——編『異文化を生きた人々』(叢書比較文学比較文化) 中央公論社, 1993年
牧野陽子『ラフカディオ・ハーン』中公新書, 1992年
村形明子「ジョン・ラファージと日本」『季刊藝術』1972年春号, 82-96頁

日本の庭と欧米人の眼差し

- 『ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー所蔵フェノロサ資料（全四巻）』ミュージアム出版，1987年
- 山口静一『フェノロサ（上・下）』三省堂，1982年
- 山下重一『スペンサーと日本近代』御茶ノ水書房，1983年
- Josiah Conder, *Landscape gardening in Japan*, (Tokyo: Kelly and Walsh, 1893)
- Elizabeth Bisland, ed., *The Writing of Lafcadio Hearn*, 16 vols., (Boston and New York: Houghton, Mifflin & Co., 1922)
- Lawrence Chisolm, *Fenollosa: The Far East and American Culture*, (New Haven: Yale University Press, 1963)
- Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects connected with Japan*. (New York and London: Kelly & Walsh, LTD. 1890) 高梨健吉訳，『日本事物誌』（東洋文庫）平凡社，1969年
- Royal Cortissoz, *John La Farge: a memoir and a study*, (Boston and New York: Houghton Mifflin, 1911)
- Lafcadio Hearn, In a Japanese Garden, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, (Boston and New York: Houghton, Mifflin, 1894) 落合貞三郎訳『小泉八雲全集』，第一書房，1930-1932年
- Letters to and from B. H. Chamberlain*, (New York: AMS Press 1975)
- John La Farge, *An Artist's Letters from Japan*, (New York: The Century, 1897) 桑原住雄・久富貢訳，『画家東遊録』中央公論美術出版，1981年，
- Edward S Morse, *Japanese Homes and Their Surroundings*, (Boston: Ticknor and Company, 1886) 上田篤・加藤晃規・柳美代子訳，『日本のすまい・内と外』鹿島出版会，1979年，齊藤正二・藤本周一訳，『日本人のすまい（上・下）』（生活の古典双書 16）八坂書房，1979年
- Japan Day by Day 1877, 1878-79, 1882-83*, Vol 1-3, (Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1917)
- R. Tanabe, T. Ochiai, and I. Nishizaki, eds., *Victorian Philosophy by Lafcadio Hearn*, (Tokyo: The Hokuseido Press, 1941)

Western Gaze on Gardens of Japan in the 19th Century

Miyuki KATAHIRA

This essay examines how gardens of Japan were perceived by Western authors in the 19th century, by analyzing the writings of Edward S. Morse (1838–1925), John La Farge (1835–1910), Basil H. Chamberlain (1850–1935), and Lafcadio Hearn (1850–1904), who also played an important role in introducing Japanese culture to Western readers. Japanese gardens had already been introduced by Josiah Conder, an English architect and the author of *Landscape Gardening in Japan* (1893). Conder methodically explained the history, composition, and ornaments of Japanese gardens as well as introducing some well known gardens in Japan. The essay will compare and analyze how the four authors described Japanese gardens, and also the impact of Conder’s writing on them.

Morse, a zoologist, described how stones were precisely placed in order to compose a whole garden, and interpreted such features as reflecting the “reserve and sense of propriety” of Japanese people, based on his observation. La Farge, an artist who initiated *Japonisme* in the United States, visited Nikko with Okakura Tenshin (1862–1913) and Ernest Fenollosa (1853–1908) and described how a garden is drawn from nature and expresses “the ideas of peace and chastity, quiet old age, connubial happiness, and the sweetness of solitude”.

Chamberlain, a linguist, and Hearn, known for his numerous and influential writings on Japan, each refers to Conder’s book, yet there is a stark contrast in the way they described and interpreted Japanese gardens. In *Things Japanese*, Chamberlain summarized the principal points of Conder’s writing

and presented a brief digest of Japanese gardens in a rather indifferent manner. Hearn also extracted some essential points from Conder's writing, yet he beautifully described the garden of his house in Matsue, and emphasized that how to "feel" is a key to understanding Japanese gardens. Reflecting the influence of Spencer's ideas, Hearn argued that to appreciate Japanese gardens requires one to understand Japanese people's innate sensibility.